

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	和魂洋才とマクロ経済的状况
Author(s)	ファリス ナウファル ルクマナ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 27期 : 34 - 43
Issue Date	2012-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038798
Right	
Relation	



和魂洋才とマクロ経済的状况

ファリス・ナウファル・ルクマナ

はじめに

かつて日本はアメリカよりも発展が遅れていた。しかし今日、日本はアジア代表の先進国である。経済の面でも技術の面でも日本は欧米国に遅れてはいない。たくさんの技術や機械等が日本の手によって生み出されてきた。その努力の裏には他の発展途上国にないような心がけがある。

今日、日本に存在している技術はすべて自らの手で作り出された訳ではない。西欧から日本に入ってきた技術を真似て、そしてそれを身につける。このような方法で日本人は自分の国を発展してきたのである。以前から日本人は外からの文化や技術などを鵜呑みしてきた訳ではない。気付かないうちに日本人は自分達に合うようにそれらの技術に手を加えてきたのである。例としてあげられるのが、仏教と道教の上陸である。日本の仏教はもとのすがたとは違っているし、道教は神道という形で生き残った。彼らは自分たちに合うようこれらに手を加えてきたのである。これが和魂漢才である。彼らは外国からの文化を取り入れたが、そのまま鵜呑みにしてしまうのではなく工夫して自分たちに合うような文化を作り上げてきた。和魂漢才と和魂洋才は名称だけが違っている。中身と行為は同じだ。彼らは外国の文化を選んできたのだ。

和魂洋才は西洋からの文化や技術を選択し鵜呑みにしない日本人の考え方の表れである。彼らはその文化を自分たちの生活に吻合出来るよう手を加えていき、合わないものは捨てていったのである。これは仏教と道教が日本に上陸してから行われてきたことである。和魂漢才は中国文化が日本に伝わってきた時のもので、和魂洋才は西洋文化が日本に伝わってきた時のものである。

日本は他の発展途上国と違った道を歩んできた。それは、他の国が簡単に真似出来ないようなことである。例え真似たとしても成功するかどうかの問題になる。幸運、努力、実力が日本にあったと考えるが、和魂洋才を取り入れたことで日本のマクロ経済状況にどのように影響をもたらしたのだろうか。

そこで本稿では、日本で起きた出来事をいくつか取り上げ、従来の文化の受容が日本のマクロ経済的状况に影響したという諸研究の流れを概観し、和魂洋才と関係づけることによって日本経済の発展の特徴を明らかにしたい。

和魂洋才

1. 儒教、道教、宗教

和魂洋才について、ここでは特に儒教、道教、宗教について日本の特徴を森嶋（1984）

の『なぜ日本は成功したのか?』をもとに概観する。

現在、日本には儒教、道教、神道と仏教という教えが存在する。日本人はこの教えを深く理解する人もいればそうでない人もいる。明確な理由はないが漠然と理解するひとが多いであろう。だが、この教えが日本人の考え方に深く関係していることは考えられる。そのために、まずは儒教と道教の起源を見てみよう。

龔(1993)によれば、「紀元前から、すでに「儒」と呼ばれる官職が存在しており、その役目は社会の教化、政府の制度、作法、あるいは宗教の祭儀を定めるものであった。」儒教は一種の宗教と思う人もいるかのようだが、元は一種の機関である。知識高きものが集まり、政府の制度や作法などを創り、知識無きものの生活水準を高めようとしていた。知識無きものは官吏のおもうままに指導されていた。春秋時代の学者、また最初に儒教を日本に伝えたといわれている孔子もその官吏の一人である。

森嶋は、この儒教について、以下のように説明している。「儒教には五つの徳目が重視されており、そのなかで孔子は、仁とは人道の中心となるべき徳目であると考えた。仁は目上、家族、長者を尊重し仕えるべきだという徳目である。これにより、家族や家族外の者にも、さらに未知の人々にもまったく自由のそそがれるべき、人間は完全であり、社会秩序が保たれると孔子は考えた。また、仁を実現させるには義、知、和、勇の徳目が必要であると孔子は述べた。和は人々と和合し、社会のなかで調和を保つことである。勇は正しい目的のためでなければならない。義で調節し、知で補給する。この四つの徳目が仁者になる必要な徳目である。」このように、宗教だと思われている儒教は官職が元であり、人々の知識を高め、政府制度、社会の教化などが役割で国民の生活水準を上げようとしていた。孔子により伝わってきた儒教は仁の徳目を強調し人にと伝えられてきた。また、仁者になる必要な徳目は義、知、和、勇である。

「道教は儒教と異なって神に仕え呪（かんなぎ）という名前の巫女がおり、その役目は解夢、星占い、予言などといった呪術的な者である」（龔、1993）。すなわち、道教は儒教と異なり魔術的なものが教えのなかには含まれており、人々に伝えられてきたのである。また、森嶋によれば中国から輸入して取り入れた道教は独立できず、神道という宗教のかたちで伝わってきた。だが、なかに含まれている教えは同じであり名称だけが変わったのである。

日本の儒教と中国の儒教は異なっているといわれている。お互いに同じ儒教の教えを取り入れたが、異なった発展を遂げ、また異なった思想が社会に現れている。中国の儒教と日本の儒教はどこが異なっているか、また中国の道教と儒教がどのように影響していったかを見てみよう。

「日本の儒教は忠、礼、勇、信、質素を重視しており、忠を主君に専心尽くそうとする真心や、身を捨ててまで君に尽くすと解釈している。これに対し中国の儒教は智、信、仁、勇、厳を重視しており、忠を自分自身に対する誠実と解釈している」（龔、1993）。つまり、日本と中国の儒教が異なっているのは徳目にあり、信と勇だけが共通している。また、仁

は古くから日本の儒教に存在しており近代になればなるほど仁の代わりに忠が最も需要だと考えるようになったと森嶋は述べている。事実、日本の政府制度や日本国民の生活習慣は変わり文化も時につれて変わりつつあった。古くから日本に存在している仁も変わり、5世紀の聖徳太子の時代に創られた官位十二階で国民は仕えなければならない存在をはっきりと示された。

道教も儒教のように中国から伝わってきた。中国では儒教は政府の武器かのように装備されていた。中国の政府は儒教を基に国民を統一させ、国を推進させた。それに対し、道教は反政府的で隠遁生活を奨励し、また国民は政府に楯突くこともあった。

国を統一させるにはまず国民が一つの思想や目的を共有しなければならない。思想や主義が異なっても目的が同じなら、少なくとも簡単になることであろう。だが、中国のような広い土地を持ち、政府と異なった思想を持った国民が存在しうる場合は簡単に国を統一させ推進することは困難であろう。

「日本の政府も儒教を武器のように装備し国を統一させていたが、七世紀に封建制度で領土の外が想像できない日本国民は革命や政府から与えられたこと以外は考えられなかった」(森嶋)。当時の日本国民は中国国民より政治に対する知識が狭かったと考えられる。封建制度を行ったために日本国民は奴隷であったかのようにおもえるが、これは政府が国民を簡単に統一できるように行った政府制度である。知識が狭い人は何も反抗することができない。それ以外にも、二人目の秀吉がでないよう秀吉は刀狩りを行い農民の力を奪い取っていた。よって、国民の力はなくなり政府は簡単に国民を統一し、コントロールすることができた。

「中国は儒教と道教をそれぞれ神秘的、個人主義的の宗教としてもっていた。また、日本よりも多く個人主義的、より少なく国家主義的であった」(森嶋)。従って、中国では革命が何回も生じることは不自然ではない。毛沢東や孫文のように異なった主義を持つ二人の革命家が生まれるのもこのせいであろう。毛沢東は共産党であり、儒教の力を使い国民を統一させようとしていた。だが、国民は道教を信仰し政府に反していた。また、孫文は国民党であり「三民主義」民族、民権、民政から成る政治倫理を創った。これは国民のことを考え、尊重する主義であった。つまり、国民に力を与えていた。これにより、中国で何回も革命が繰り返し生じる一因が分かる。毛沢東主義により文化大革命が必要であるという意図は理解不可能ではないと森嶋は述べている。また、官僚派と実権派は批判され「三差」(都市と農村、工業と農業、精神労働と肉体労働の差)の解消が文化自派のスローガンになっていた。

「日本人は非宗教的であるゆえに唯物的であり、また同時に他方で国家主義的であったから、彼らは日本が国家として物質的に繁栄するのに、協力を惜しまなかった」(森嶋、1984)。すなわち、維新前後の多くの日本人は宗教的なものに興味がなく明治維新という政府の革命で慌ただしかった。明治以前に道教と儒教は日本に伝えられたが、日本人が非宗教的で唯物的であるから宗教的な意識が希薄化されたと考えられる。また、国家主義的であった

ため中国のように個人主義は繁栄しえなかった。

このように、日本は和魂漢才で儒教と道教を中国から取り入れたのである。日本の儒教と道教は旧儒教と道教とは異なり日本独自のかたちで受け入れ、手を加えていき、今日存在しているのである。また、儒教とは日本人の精神をつくっていく教えである。例、仁、義、礼、信、忠、悌、知はすべて儒教のなかにある教えである。それぞれの文字には意味が含まれており、一つの文字には儒教の教えがその文字によって意味される。例として忠、この文字には天皇に対する忠実さが含まれてある。また、日本の儒教と中国の儒教は異なっており、社会で進歩してきた主義も異なっていた。当時の日本は和魂漢才を行い、文化や宗教的なものを中国から輸入していた。

2. 西洋技術の移転

和魂洋才について、ここでは特に西洋技術の移転について日本の特徴を大野健一（2005）『途上国ニッポンの歩み』をもとに概観する。

明治時代の日本は西欧から「猿」というあだ名がつけられていた。つまり、西欧文化を猿真似していると考えられていた。旧文明のアジアから見れば狂気に見え、ヨーロッパ人から見れば笑止な猿真似に見えていた。しかし、当時の日本と日本人は大まじめだった。産業革命による文明の主流にのろうとしていた。産業と軍事は西欧よりも遅れていた。それを一挙にまねることで、できれば一挙に身につけ、それによって西欧同様の富国強兵の誉れを得たいと思っていた。いや、誉れというゆとりのある心情ではなく西欧をまねてその力を身につけねば中国同様の亡国寸前の国になると考えていたのである。

そのため、日本は三つの異なる方法を行い、西洋技術の輸入に励んだ。1. 外国人雇用、2. 日本人技師の育成、3. コピー生産ライセンス生産および技術協力契約を中心に日本は西洋技術を身につけて行ったのである（大野、2005）。

2.1 外国人雇用

明治初期の日本には工場やインフラストラクチャーの整備が盛んになり、それに伴い工業に西洋技術を導入しようとする日本は外国人を雇わなければならなかった。最も役立っていた技師や管理人者の給料は高く政府予算の大きな圧迫要因となっていた。図1に示されているように1875年で最も多く雇われた技師約200人が8年後の1883年には急激に減少し約50人にも満たなかった。4年後の1887年には約60人にまで増加していったものの、1891年にはまた減少し1895年には約10人となった。ここから、お雇い外国人技師は20年間しか必要とされなかったということが分かる。それに対し、学術教師は1875年の約150人から1883年の約40人にまで減少していったが、その8年後の1891年には約100人にまで増加し、4年後の1895年には約80人までとわずかに減少している。これは、日本人が西洋技術を20年間の間に素早く吸収し政府は外国人技師に予算をかけたくなくなつたと考えられる。また、1895年に技師よりも教師の方が多いのには日本政府が技術より教育

の方が重要だと思っていたと考えられる。

(人)

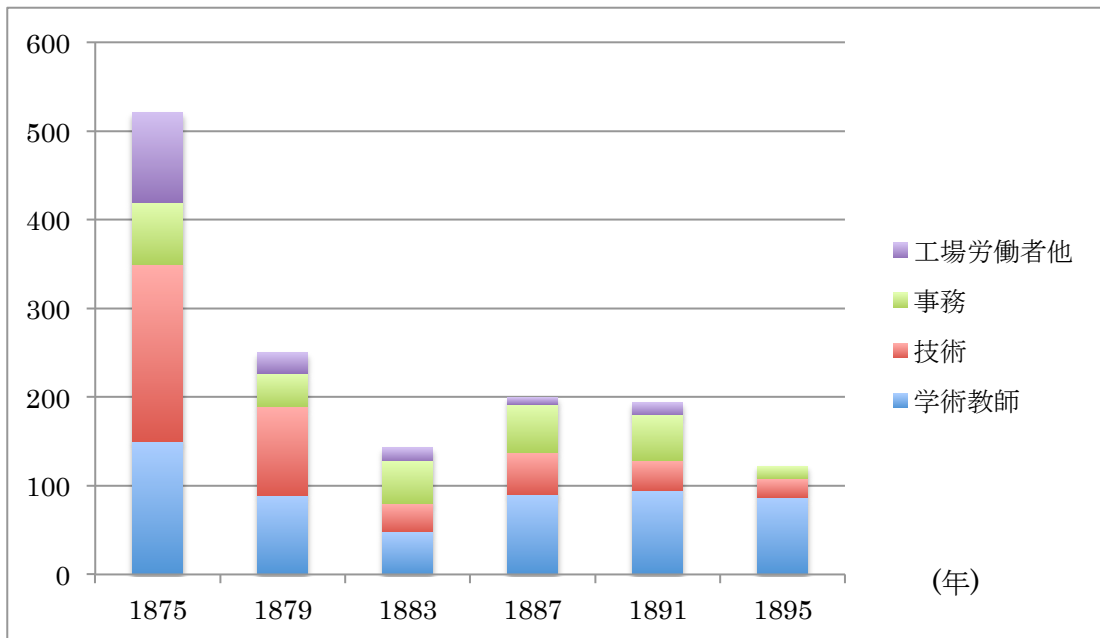


図1 明治政府のお雇い外国人

大野は、外国人給料を日本人と比較して、示している。表1に示されているように、外国人雇用の給料は当時の日本の総理大臣より高いことが分かる。イギリスから来日したカーギルは工部省鉄道局で働き、月給は2,000円であった。それに対し、日本人の岩倉具視は右大臣、岩倉遣外使節団長として月給は600円となっている。ここから、外国人技師の給料は総理大臣である日本人の3倍以上ということが分かる。

表1 お雇い外国人と政府高官の俸給比較

氏名 (国籍)	所属	月給
カーギル (英)	工部省鉄道局	2,000 円
キンドル (英)	大蔵省造幣局	1,045 円
モレル (英)	工部省鉄道局	850 円
ケプロン (米)	開拓使	833 円
岩倉具視 (日)	右大臣 (総理大臣に相当)、岩倉遣外使節団長	600 円

2.2 日本人技師の育成

政府予算に窮していた日本政府はお雇い外国人を減らし、優れた学生達を西洋諸国に派

遣した。外国人技師への浪費を長く続けたくなかったため、政府は若くて優れた学生を国費留学生として西欧の一流大学へと派遣した。これが当時でいう使節団である。明治維新後、政府は近代国家の建設に取りかかり、日本を西洋諸国に対抗出来る国に作り上げようとしていた。ここで役立ったのが使節団である。

「ヨーロッパ諸国に派遣された使節団からの情報を基に政府はどの部門はどの国を真似るべきかを決定した。帝国海軍はイギリス海軍のコピー、陸軍はフランス陸軍、電信や鉄道はイギリス、大学はアメリカ、明治憲法と民法はドイツ、刑法はフランスを真似している。また、日本に公布された学制はフランスの学区制度を模倣している」（森嶋）。このように日本は、先進国の優れた部門を取り入れ、それを真似ることで西洋なりの明治国家になると考えたのではないだろうか。

単純に考えればそうであるのだろうが、森嶋は、合成されたなかで摩擦が起こりえないはずがないと述べた。まさしくその通り、一方所に集められた優秀な人達は自分が誰よりも優れていると思うはず。だが、日本は先進国の優れた部門を取り入れた。これは、各部門での争いが起こりえる原因である。

また、日本人は西洋式の衣食住も取り入れ、生活習慣が変わった。「日本人は二重構造と呼びうる生活をするようになった」（森嶋）。日本人は、西洋式の衣食住をとりいれると同時に、伝統的な日本式生活を持ち続けたのである。政府のスローガンが「和魂洋才」であるため、日本人はたとえ生活費が高額になってもこの生活を好んだ。それに伴い、企業も変化していった。以前、伝統的なものしか創らない企業だけが存在したが、洋服、洋食器、洋館用家具などを創る企業が出てきた。

2.3 コピー生産ライセンス生産および技術協力契約

「西洋をまねてその力を身につけようとしていた日本はリバース・エンジニアリングという方法を行っていた」（大野）。リバース・エンジニアリングとは、競合者の新製品を購入して、それを分解し、その製品における製品技術を読み取るエンジニアリング活動のことである。（ブリタニカ国際第百科辞典）これによって、日本は先進国に一步近づく道を創ったのである。リバース・エンジニアリングを実施することにより、日本は鵜呑みのまま西欧技術を取り入れるのではなく、その機構や構造までも学べることができた。そこから、日本人は自らの手で機械や新たな技術を生み出すことができたのだろうと考えられる。また、『電子立国家日本の自叙伝』には日本人は西欧技術をどうにかして日本に取り入れ、生活のなかで生かそうと努力していた様子が見られる。

西欧技術に使用していた材料が日本にない場合は自分の知識を生かして、自らの力で新たな技術をつくりだしていった。日本人の『発展しよう』とする気持ちがここにも見られるであろう。和魂洋才を生かして、中身のない先進国ではなく、中身のある先進国を目指したのである。

また、西洋技術の移転では工部大学の卒業生が最も重要な役割を果たしていた。日本政

府は若者の力を必要としていた。前述した使節団は海外で情報を国内に送る役割を果たしたのに対し、工部大学の卒業生は海外からの技術を受け取り、その性質を分析していった。ここから、若者は政府にとって大事な人材だということが分かる。

このように、大野によると日本政府は国家を先進国にするために様々な努力を行った。西欧技術の取り入れ方には三つの方法を実行し、政府の主導で進められたようにみえるが、国民も役に立っていた。とりわけ、若者は力も知識吸収も強いため日本政府は外国人を長く雇用せずにした。また、テクノロジーを速く吸収した日本には資金を莫大に使わずにした。政府がかかげた「和魂洋才」というスローガンは国民に影響を及ぼし、国民は政府と一体になって先進国造りに励んだのである。

明治時代のマクロ経済状況

以上見てきたように、西欧諸国に追いつこうと、明治維新で一刻も早く変化を遂げたい日本人は国民全員が一つになり、新たな社会を創り上げようとしていた。新たな社会を創っていくには、西欧文化を導入する必要があった。そのなかで和魂洋才という精神的なかたちが重要な役割を果たしたのは確かである。次は、従来の西欧文化を取り入れることが当時の日本のマクロ経済的状況にどのような影響を及ぼしたかを見てみよう。

1. 殖産興業

「明治維新後、近代国家を作り上げようと日本政府は西洋に対応できる経済的状況をつくり出そうとしていた。そのため、政府は産業を盛んにし、生産を増そうと殖産興業を行ったのである。その他にも、インフラの建設や企業からこの計画は莫大な費用が必要となってきた。ここで、重要な役割を果たしていたのが繊維工業と地租である。」(坂根、1970)

日本政府は廃藩置県、封建制度の撤廃、地租改正などといった日本独自の政府制度を廃止したのであるが、殖産興業に必要な地租は廃止しなかった。地租とは田、畑、宅地、山林などといった土地に対して課する利益税である(広辞苑)。政府はこの利益税から日本の企業やインフラを建設することができた。

江戸時代に徳川の手によって制度化された地租は明治時代のインフラ造りに役立っていた。また、当時の日本政府は小企業を養い、その利潤で大企業を創り上げてきたのである。小企業は国民にまかせて、大企業は政府がコントロールするというかたちで経済安定を保ち始めたのである。

また、大部分の小企業は繊維工業である。生糸は日本古来の伝統的産業であった。その性質は幕末の19世紀半ばに貿易が再開されることによって、世界に認められた。そして、発展していき最終的には輸入代替えに成功した日本代表の企業になったのである。政府は小企業を養い育てていく上で大企業やインフラを創り上げることに成功した。

「日本は日々継承してきた伝統技術を否定し、さらにその職人養成の方法を否定した新たな養成方法が模索された。この過程で具体化された方法のひとつが修技校とよばれた学

校制度であった」(吉田、2007)。つまり、日本政府は殖産興業を行うために機械のことを知らない日本国民のために修技校を建設したのである。日本政府は積極的に日本という国を西欧諸国に対応できる先進国の方向に近づけようとしていた。

また、大内による梅野福寿らの研究を見ると新技術導入は3つのタイプに分類される。まず、新技術を取り入れ、在来の環境状況を見捨てることによって新技術に対応できる社会条件をつくりだす、一定の「社会革命」と並行的に推移される全面輸入型。第二は、輸入技術が土着の在来技術に飛躍の契機を与え、輸入技術が在来技術と結合し独自の技術を生み出すという折衷型。第三は、輸入技術が旧来の社会的条件となじまず、新技術は定着することなく拒絶されるという拒絶型である。

日本の機械製糸業は、水車動力という自然的要因と、多くの女子を労働力にしていたため、導入した外国機械を改良せざるを得なかったということで、パターン(2)に当てはまる。また、日本の農業は慣れきた農具によって営まれてきた小農に依存しており、相対的に工業よりも人間に依存した技術が多かったために、従来のやり方を踏襲するパターン(3)だと大内は述べている。

このように、日本の近代化(発展途上国が社会変動の上での模範とすべき経済的、政治的、社会的、文化的なモデルとして)には政府が関わり、国民をコントロールしていったのである。日本政府は、大企業建設に必要な地租と繊維工業を発展させるうえで大企業を創り上げてきた。また、世界から認められた繊維工業は外国からの輸入技術を加えることで独自の技術を生み出してきた。それが、発展し続けることによって政府は大企業を作り上げることに成功した。

2. 日清戦争と「戦後経営」

日本は自国の権益を守るために、国境をこえる「利益線」を造り上げようとしていた。日本は勢力範囲をまわりの国に広めることにした。領域を広めることによって、西欧諸国(当時、勢力範囲を広め植民地政策に励んでいた)から自国の利益を守ろうと考えたのである。そこで、日本に一番近いと見られる朝鮮半島を植民地にしようとしていた。だが、清(中国)は朝鮮半島を保護国とみなし日本を妨害した。

日本は軍事的挑発、朝鮮王妃の殺害、クーデタ未遂などを引き起こし、政治状況を不安定化にさせた。こういった事態が続き、ついに日本と清が衝突したのが1894～95年の日清戦争である。やがて、日本は清を打ち負かしたのである。この勝利によって、日本は3億1000万円の賠償金、および台湾と遼東半島を獲得したのである。

賠償金を獲得したことにより日本の中央政府・地方政府は強力に公共支出プログラムを推進した。それが、戦後経営である。日清戦争が終わるにつれて、財政金融を引き締めるのではなく、継続拡大に傾いて行った。この戦後経営のため、国際収支は赤字化し、日銀は金準備をしいに喪失していったのである。こうして、日本は経済危機の中で第一次世界大戦を迎えたのである。

このように、日本は自国の権益を守るために「利益線」を創り上げていった。そして、清国と激突し、勝利を手にした。この影響で、列強は弱体化した清国に対して利権の獲得、勢力圏の設定、領土の半永久的租借など中国分割競争を行った。それに対し、日本は獲得した賠償金で自国のインフラを発展させようと努力していたが、順調にいかず国際支出は赤字化していったのであった。

おわりに

以上見てきたように、日本の近代化には政府が関わっている。西欧からの技術移転には三つの方法を行い、「和魂洋才」というスローガンをもとに近代化を進めていった。日本では国民による反乱は少なく、ほとんどが政府による反乱であった。天皇から権力を奪い、政府同士が互いに権力争いをする等、すべてが政府の欲望で生じたことである。それに対し、日本国民を見てみると封建制度で階級を定められ、明治維新までは政府に対する知識は少なく、天皇の名前と顔すらわからない。つまり、日本国民は自分たちが米を育てそれを政府に渡す存在であることにあまり疑問を感じなかったのである。このような状況では反乱も起こるが、他国と比較してみると大した反乱ではない。日本政府もこのような状況を生かして日本国を近代化の道へ進めていったのである。また、日本政府は地租と繊維工業を土台として大企業を創り上げていった。日本国にあるものを生かして、原材料として日本を先進国の第一歩へと導いたのである。

次に私は、森嶋と同様「和魂洋才」は政府が国民に掲げたスローガンであると考え。日本は伝統文化が強い。だが、明治維新という政府革命で日本のアイデンティティが失われるのは残念だ。そのためにも、政府はこのスローガンを掲げて日本のアイデンティティが失われないようにしていたのだ。その影響で、日本には二重構造生活という習慣ができた。和風と洋風の生活習慣を一つにして一日を過ごしているのである。例として上げられるのが食文化や部屋のスタイルである。洋服、洋食器、洋館用家具などを創る企業が存在するようになったのもその影響である。

最後に、なぜ日本は他の途上国と違った発展を成し遂げたのだろうか。その一因は、日本人が非宗教的であるゆえに唯物的であり、また国家主義的であるためではないかと考えられる。現代の日本人は宗教的な人もいるようだが、宗教的なものが日本に伝わってきた時、日本人は非宗教的であったと森嶋は述べている。宗教的に物事を考えなかった日本人は大企業を造って行き、自国を発展させることしか考えていなかったのだろう。

本研究は、日本の成功を研究する留学生達に対してより簡単にわかりやすく理解できるように作りあげた。今回は概観的であったが、今後、さらに詳細に研究を進めていきたい。

参考文献

上田敦夫、『ジャパンアズナンバーワン再考—日本の成功とアメリカのカムバック』、ティ

ビーエス・ブリタニカ、1984
鈴木淳、『維新の構想と発展』、講談社、2002
藤井譲治、伊藤之雄『日本の歴史』、ミネルヴァ書房、2010
大野健一、『途上国ニッポンの歩み』、有斐閣、2005
水谷允一、『戦後日本経済史』、同文館、1991
南亮進、『日本の経済発展』東洋経済新報、1981
ロバート・ハイルブローナー／ウィリアム・ミルバーグ著、菅原歩訳、『経済社会の形成』、
ピアソン・エデュケーション、2009
石井進、『日本史』山川、2006
村川堅太郎、『世界史』山川、1991
大内章子、『欧米経営技法の導入-昭和30年代生産性運動に見る-』、1997
坂根義久校注、青木周蔵自伝』、平凡社、1970